

「内外表裏事」（『古秘抄別本』）と『内外口伝歌共』

小 高 道 子

宗祇流の古今伝受における「裏説」について記した切紙として、『古

秘抄別本』の中の「内外表裏事」が取り上げられることが多い。新井

栄蔵氏は「内外表裏事」と『内外口伝歌共』との関連について記され、

「古秘抄別本」のように、まず「内外表裏事」をいう切紙があり、つ

いでその「表裏」を注した二十四首、その「内外」を注した二首が続

く形のもが最もよく原口伝の状況を反映していると推定してよいよ

うである」とされた。

しかしながら、宗祇を継承する三流の古今切紙を検討すると「内外表裏事」は見られない。宗祇が門弟に相伝した切紙には「内外表裏事」

が見られない以上、新井氏が推定される「原口伝の状況」は再検討す

る必要がある。本稿では、「内外表裏事」と『内外口伝歌共』の關係

について検討を加えたい。

一 内外口伝歌

この「内外表裏事」について、新井栄蔵氏は内外口伝歌との關係を次のようにまとめられた。¹⁾

ここに、「表裏」の説を述べる二十四首に「内外」の説を述べる二首を加え、合せて二十六首」と述べたものは、たとえば「国書總目錄」に「内外口伝歌共」として掲げられた書陵部蔵（古今伝授資料の内）の一本が、その一伝本である。この形のもは二十五首のもが最も広く流布しており、他に二十四首のもの、二十六首のもの、また口伝の内容たる注のついたものなどが見えるが、ここに取上げた「古秘抄別本」のように、まず「内外表裏事」をいう切紙があり、ついでその「表裏」を注した二十四首、その「内外」を注した二首が続く形のもが最もよく原口伝の状況を反映していると推定してよいようである。便宜に従い現在判明して

いるかぎりで簡略に諸本をあげてみる。

『古秘抄別本』に含まれる「内外表裏事」には『内外口伝歌共』に見られる二十四首が続くが、『内外口伝歌共』には、「内外表裏事」に続くものと、それだけを記したものとがある。また、『内外口伝歌共』は、注のあるものとないうものがあり、歌の数も二十四首から二十六首まで三通りあるという。そうした種々の『内外口伝歌共』の中で、『古秘抄別本』に見られる「まず『内外表裏事』をいう切紙があり、ついでその「表裏」を注した二十四首、その「内外」を注した二首が続く形のもの」が、「最もよく原口伝の状況を反映していると推定」された。

『内外口伝歌共』は、三条西実枝から細川幽齋への古今伝受の時に、幽齋が古今伝受終了後すぐに書写した重要な古今伝受資料の一つである。歌数は二十四首で、すべて『古今和歌集』の中の和歌である。注釈は付されず、和歌のみである。幽齋から古今伝受を受けた智仁親王も、古今伝受資料を書写する時に、まず『内外口伝歌共』を書写している。そして、本書だけは、書写し終えた古今伝受資料をまとめて返す時ではなく、先に返却したと推定される。こうしたことから本書は、三条西家の古今伝受において重視された一巻と推定できよう。

この『内外口伝歌共』に注を付したと思われる記述が、柴田光彦氏を紹介された三条西実隆の書状に見られる。この書状は、明応七年に三条西実隆が徳大寺実淳に切紙を与えた時の書状であると、柴田光彦

氏の考証により推定された。その三通目に、『内外口伝歌共』についての記述が見られる。

内外口伝哥一紙注出候ハこれハ無別事候。裏の説共ある哥と／又風躰必可存知哥とその／表裏を申候ニて候。談義の時／計ニて候。以前御尋候し宇治山の哥ハ入候ハぬ。彼哥之類／又裏の説を本としたる哥共候／それも此廿四首ニて則御心得／あるへき事候。一句抛脚事候間／只星月夜ハかりの事ニて候

「内外口伝哥一紙」は、二十四首であり、「裏の説共ある哥と、又風躰必可存知哥と、その表裏を申候ニて候。談義の時計ニて候」という。実際は実淳に「内外口伝哥一紙」を与えたが、それは二十四首であり、そこには表裏の注が記されていたという。実隆が注のついた「内外口伝哥一紙」を与えたという以上、実淳に与えられた「内外口伝哥一紙」には、注がついていたことになる。三条西家において継承された『内外口伝歌共』に注が付されていない事を考えると、あるいは、もともと二十四首の和歌のみであった『内外口伝歌共』に、実隆が注を付して実淳に与えたものかもしれない。新井氏は「まず『内外表裏事』をいう切紙があり、ついでその「表裏」を注した二十四首、その「内外」を注した二首が続く形のもの」が、「最もよく原口伝の状況を反映していると推定」されたが、二十四首に後から注が付されたのか、あるいは注がついた二十四首が原形であり後に注が失われたのかは、改めて検討する必要がある。また、実隆が実淳に与えた二十四首が独

立した「内外口伝哥一紙」であり、「内外表裏事」をいう切紙については言及されていない。「内外口伝哥一紙」は、切紙とは別に与えられているから、「まず「内外表裏事」をいう切紙があり」という新井氏の「原口伝」のあり方についても再考する必要があるだろう。

二 「内外表裏事」と『古今和歌集両度聞書』

細川幽齋が授受した古今伝受において、「内外表裏事」とする切紙は見られない。また『内外口伝歌共』は切紙とは別に継承されていた。「内外表裏事」は、宗祇を継承する三流の古今切紙にも見られないことから、「内外表裏事」という切紙及びそこに記された二十四首を切紙として相伝することは、少なくとも宗祇を直接継承する古今伝受には見られない。それでは、「内外表裏事」という切紙には、講釈では相伝されなかったひせつがしるされているのだろうか。次に「内外表裏事」に記された二十四首と、宗祇が常縁の講釈を聞書した『古今和歌集両度聞書』とを比較してみよう。『内外口伝歌共』に収められているのは次の二十四首である。引用は国歌大観により、私に通し番号を付した。

- | | | | | | |
|---|-----|------------------------------|----|------|--------------------------------|
| 1 | 59 | 桜花さきにけらしなあしひききの山のかひより見ゆる白雲 | 22 | 1064 | 身はすてつ心をだにもはふらさじつひにはいかなるとするべく |
| 2 | 81 | 枝よりもあだにちりにし花なればおちても水のあわとこそなれ | 23 | 1071 | 近江よりあさたちくればうねののになづぞなくなるあけぬこのよは |
| 3 | 135 | わがやどの池の藤波さきにけり山郭公いつかさきなむ | 24 | 1096 | つくばねの峰のもみちばおちつもりしるもしらぬもなべてか |
| 4 | 152 | やよやまで山郭公事づてむ我世中にすみわびぬとよ | | | |

- | | | |
|----|-----|----------------------------------|
| 5 | 170 | 河風のすずしくもあるかうちよする浪とともにや秋は立つらむ |
| 6 | 292 | わび人のわきてたちよるこの本はたのむかけなくもみちちりけり |
| 7 | 315 | 山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば |
| 8 | 341 | 昨日といひけふとくらしてあすかがは流れてはやき月日なりけり |
| 9 | 351 | いたづらにすぐす月日はおもほえて花見てくらす春ぞすくなき |
| 10 | 361 | 千鳥なくさほの河ぎりたちぬらし山のこのはも色まさりゆく |
| 11 | 387 | いのちだに心になふ物ならばなにか別のかなしからまし |
| 12 | 404 | むすぶてのしづくにこる山の井のあかでも人にわかれぬるかな |
| 13 | 409 | ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしぞ思ふ |
| 14 | 410 | 唐衣きつつなれにしましあればはるるきぬるたびをしぞ思ふ |
| 15 | 422 | 心から花のしづくにそほちつづくひずとのみ鳥のなくらむ |
| 16 | 430 | 葦引の山たちはなれ行く雲のやどりさだめぬ世にこそ有りけれ |
| 17 | 621 | あはぬ夜のふる白雪とつもりなば我さへともにけぬべきものを |
| 18 | 807 | あまのかるもにすむむしの我からとねをこそなかめ世をばうらみじ |
| 19 | 850 | 花よりも人こそあだになりにつれいづれをさきにこひむとか見し |
| 20 | 879 | おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの |
| 21 | 989 | 風のうへにありかさだめぬちりの身はゆくへもしらざるなりぬべらなり |

なしも

25 828 流れては妹背の山のなかにおつるよしのの河のよしや世中

三 「内外表裏事」（『古秘抄別本』）と『古今和歌集両度聞書』

聞書』

次に両者を対照して表にする。

3 135	2 81	1 59	我宿此哥名哥也 誠遠白く哥の本躰也 藤さげハ時鳥のはや鳴へきと云ハ※道也 只光陰のうつりかはる心をもつなり 此哥ハほのくとの哥とも同躰たるへきにやと云程の哥也	是ハ延喜崩御の後の哥といへり 是ハ理ノかた哥也 人間生る、より死門におもむく道理を以て枝よりもあたるといへり 如此観する時閑に心かるき也 されハ哥人ハ物をよく観念すへき事也	此哥ハ晴の哥の本躰なり 更無別義 よミくたしてしかもたけたくたくひなき也	藤さきたれば時鳥を聞そへまほしくて待にはあらず。たゞ藤もささくれば、ほと、ぎすもいつかきなかと大やうにいふべし。春過、夏きたりぬるほどの光陰を思ふにゆあ。すがた心深遠の歌也。尤可仰歌とぞ。	此歌は追て入待る歌也。御門かくれ給て後入り。この歌を入れるに種々の心あり。先、風流のすぐれたる歌なればなり。又崩御の後になげきの切なる時、此歌を思ふに、ちるもはかなき花の落ちてもあわとのみなるをあはれとおもふよしにや。又枝よりもとは、生にとる。泡となるとは、死の	幽玄の躰、又晴の歌のすがたなり。尤所仰是故侍り。こと書にもならひあり。	古秘抄 両度聞書
----------	---------	---------	---	--	--------------------------------------	--	---	-------------------------------------	-------------

7 315	6 292	5 170	4 152	面白幽玄なる哥也 心もおもしろし 春花夏ハ時鳥秋は紅葉に見し人めもかれはてたる躰也 風躰又たくひなし	わひ人と云よりうき身也 然はミをもなくさめん為紅葉のかけに立よれハ此紅葉又ちる也然ハたのむかけなき也 されとも是又かへりてたよりと成義也 心ハ是世上の観念也 中くの人ハ是世をわたらんよりハたのむ事なくなるハ菩提の縁也 万の事此ことほりを観すへき事也	河風の晴哥也 あさやかにこと、なる事なく殊勝躰也 是哥本也	やよやまで 此哥ハ理のかたを本とする也 只世上にハ心をと、めましき事なりと観念する所哥人の心なり 此世つられハと云ハわろし	山里のさびしさは四時にわたれり。されど、春は花の行來のたより、夏はほと、ぎすなどのよすが、秋は菊紅葉のつるでも、をのづから人めをもみ侍るを、草かれ木葉ちりはてたる比は、玉さかたのたよりもなき心をよく思ひいれてみ侍るべし。	立ちよるは、身心のうさをもなぐさめんと思へばなり。つるの心はなさけあらば貪ずる心もあるべきを、たのむかけなきが中く力ぞといへるにや。たゞ世は如此の物ぞと思かへして身を安ずる心也。	「すずしくもあるか」とは、「あるかな」也。文字につよくあたるべからず。是は晴の歌の躰也。惣じて貫之が歌は如此なるべしとぞ。	やよやまでとは、しばしと云心也。郭公はしてのたをさといふ鳥なれば、此世に我すみわびぬ、我をとくさそへと云よしのことづてなり。
----------	----------	----------	----------	--	--	-------------------------------	---	--	---	---	--

12	11	10	9	8
404	387	361	351	341
俊成卿ハ哥の本に此哥月やあらぬをいへり 是を手のあかに云さらひ道也 只あさき水のむすふにも事たらぬ義也 是ハよく心にしめされハ面白所浅くや	也 会者定離也 此理をよくしれと	遠白哥也 誠哥といは、かやうにありたき事也 山の木葉もなとたくひなくす、きたてたるやうなる哥也 能々心に趣をいつももつへし	おもほえててもし清濁両説也にこるまつよきなり 此哥ハ理方の観心に取也 春のすくなき事を驚く也 四季共同事ながら殊花の折節如此 是ハ事書に依て賀の部に入也 さらては只春なるへし	此哥ハ雑の哥たるへけれとも詞書により冬に入るなり 理説ハ此川のことく世間不定にしてはやく過る月日を思もわかす千年万年とうち過る心のあさましさを可観と也
「あかでも人に」の「あかで」を手のあかをよせたるなどいふは不用。凡俗の事也。あさき水なれば、又結べばにこりて心にかせぬ事を「あかでも」とは人によそへいへるなり。此歌、俊成卿執しおぼしたる歌也。尤以可仰せ。	女の歌にて猶哀ふかし。思ひれてみ侍るべきにや。立帰までのいのちしらぬ心也。	忠岑が也。遠白体とぞ。山の木葉もなど折節の感侍る也。	此歌はこと書にて賀部に入也。心は過にし年月は大かたに何ともおほえずして、花をみる時おどろきおしみたる心也。中五文字すみて云人もあり。当流にはにごるべしとぞ。	人の心はたゞ千年も如此也。此歌はこと書により歳暮の歌には入侍り。

17	16	15	14	13
621	430	422	410	409
人の許へ行てあはぬよ也 是も風舂よき哥の本に出す也	風舂よき哥のため出す也 心又面白 只世中ハ浮たる雲のことし 旅のミならず千秋万歳と云もそらの雲に同 序哥也	是も着する所をきらふ也 我心から尤に馴てしづくにぬれて人とかのやうになく人間皆此ことほりにまかふものなれ 爰をよくかへりみよと也	此理の説ハ物に貪着すれハ必あしき心ある也 此哥も人をわする、心のハかなき也 其いましめをしめす心也 諸事に用心有へき事也 着を切れと也	風舂の本也 幽玄にたけありて然も面白 これらは詞に出して云のへかたし 只心にかけて吟味すへくや
心は明也。但、あはぬ夜とは人のもとへいききたるにあはでかへる夜のつもる心也。此二首、人丸が歌といえり。可尋之。つねの左の注は歌一首をいふ事也。如何。	「やどりさだめぬ世にこそ有けれ」を旅などにはおもふべからず。千秋万歳とみえたる人の上、猶如此。上句は序歌也。	花にたはる、鳥の、我からしづくにぬれて「うく、ひず」とうらむる心也。此鳥は大かたの鳥なるべし。	から衣は、「きつ、なる、」といはんため也。又、「かきつはた」とをく字の用也。「きつ、なれにしましあれば」とは、年をへてなれにし妻を思やる心の切なる故に「はるくきぬるたびをしぞ思ふ」といふ也。くれくれ「旅をしぞ思」に心をかくべきにこそ。「心はあまりて」といふ、よく叶へりとぞ。	(略) いふかぎりなうあはれふか、るべきにこそ。此歌、旅に入事、尤の奥義也。霧を病などいふは不用。此歌を当流に秘する事は、心詞と、のほりて、しかも幽玄にたけたかく余情あれば也。歌道の大切不可過之、專可仰之とぞ。

20 879	19 850	18 807
<p>大方ハおよそと云心也 是も風 躰の本也 なかめて老と成て思 驚ていへる誠心あまる哥也</p>	<p>風躰の事から哀なる哥也 心姿 共たくひなき哥也</p>	<p>此理説面白 我とわかとかを知 事ハリ肝要也 然は人二恨なき 也 前の心からの哥ハ鳥の上を こなたからいひ観する也 是ハ 我うへを我と観する也 いづれ も心同 能々此理を思へし</p> <p>(略) 此后我御ふるまひのよろし からぬ事のみありしを、かへり みる心もなく過給しを、我から なり、世をばうらみじと思ひか へす事ありがたきにや。(略) 此 集は、是、道をまもる随一なり。 (略) 此歌は一部の大意也。非を くゆる外に道はなき物也。非を 知るは聖の始といふ事、是也。 尤おもふべき所也。猶可受師説 也。</p>

22 1064	21 989
<p>身こそありとも心をハよくもて 也 又此ミハ分散すれ共金剛の 正躰の心ハ更動かぬことほりを 思へと也 前の哥ハ身のはかな き事をいひ是ハ心の事をいへり</p>	<p>我身のはかなくたのむかたなき 心也 前にもかゝる哥共ありと いへ共執分ミを観す 又人風躰 より五行さたまる故によそへい へり 行急もしらすとハ如此人 となれとも行衛如此は不知所よ く菩提心を観する心也 世間想 常住なる事共前の哥共に雖多只 行も不知也</p> <p>我身ひとつのはかなうかるき 様の、わらにたのむ所なきは風 の上のちりにことならぬ物なれ ば、よそへて行衛もしらすな りぬべしといへる也。下心、以 前二首は、身、心の二也。此歌 は此二首のはてをいへる歌也。 風の上の塵とは風大・地大なり。 塵は土地。水火を風塵にもたせ たる也。人の身は風にもたれて かるき者也。五大所成に生じて 老病死にうつりてつるに行衛し らずなりぬるの心也。但、帰空 と見るは二乗の見也。生死とも に常住理也。是、法住法位世間 相常住也。一切衆生天地万物五 行にはなる、事なし。「いざこ、 に」といふよりこ、まで九首に 悉以世界に云。神道・仏法、今 世、後世をのこさず身上をはか る歌也。尤以可仰とぞ。(略)</p>

24	23
1096	1071
是ハ紅葉をあひする哥也 理心 ハ君の御心ハかやうに平等なる へき事也 只の人も他人も親子 もわかす憐愍の心をもつへき事 尤の事也 爰を能思へきと也	風躰のよき哥也 誠たけ高く万 葉などの風躰也 惣の心ハ眺望 也 是又たくひなくよき事也 此哥などハ人の心をも付ぬ哥也 かやうの所に心をかけん事肝 要なるへし 朝たつは、夜ふかく出る心也。 御調をはこぶ旅人などのいづる さま也。惣の心は羈中の眺望也。 下心あり。
なべて紅葉を愛する心也。下心、 君の心は遠親平等なるべきの義 也。	

この表から明かな通り、「内外表裏事」には、特に秘すべきと推定される事項は見られない。その内容からも『古秘抄別本』及び「内外表裏事」と宗祇との関係については再検討する必要があるであろう。

注

(1) 「宗祇流の古今集注釈における「裏説」について——古今伝授私稿——」(『文学』昭54・7)

付記

本稿は平成二十八年十月一日及び同二十九年十月二十五日に開催された陽明文庫古典資料研究会における口頭発表の一部に加筆したものである。発表に際して御指導御高配を賜った陽明文庫文庫長名和修先生はじめ会員諸氏に深謝申し上げる。

